

東京都・私立富士見丘中学校高校

グローバル人材の育成

日本人教師とネイティブ教師の連携で英語力を鍛え、探究学習で国際性を高める

変革のステップ

背景と課題

- グローバル社会で求められる英語4技能の育成に向け、40年以上続けてきた英語教育を拡充する
- 文部科学省のSGH(*1)の指定を受け、それまで行ってきた国際理解教育での探究学習を発展させる

実践内容

- **スピーキング、ライティングの指導を強化** ネイティブ講師と1対1のオンライン英会話の練習を週1回、30分間実施。週末課題に英語の日記やエッセイを課し、ネイティブ教師と日本人教師の両者で添削
- **海外フィールドワークを取り入れた探究学習** 「災害」「経済」「環境」をテーマに、持続可能な地球社会の実現に向けた課題を設定して探究。海外フィールドワークでは、英語での討論・発表なども実施

成果と展望

- 英語の資格・検定試験のスコアが伸び、中学3年次で全国の高校3年次のスコアの平均値以上に
- SGH甲子園(*2)や全国高校教育模擬国連大会(*3)の出場など、発表の場を求めて生徒が積極的に外に出るように

PROFILE



教育理念に「『グローバル・コンピテンシー』を育てる」を掲げ、英語4技能の育成、探究学習、国際交流等を推進。海外大学進学にも力を入れる。2015年度から、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」指定校。

設立	1940(昭和15)年
形態	全日制/普通科/女子
生徒数	中学校1学年約40人、高校1学年約100人

2018年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、東京外国語大、富山大などに3人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、津田塾大、早稲田大などに延べ216人が合格。海外大には、ロンドン大学キングスカレッジ(イギリス)、トロント大(カナダ)クイーンズランド大(オーストラリア)などに延べ13人が合格。

住所	〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-19-9
電話	03-3376-1481
Web site	http://www.fujimigaoka.ac.jp/

SGH指定を機に、英語教育と探究学習の深化を図る

東京都・私立富士見丘中学校高校は、教育理念に「『グローバル・コンピテンシー』を育てる」を掲げる、中高一貫の女子校だ。46年前の春季休業中にイギリス短期留学をスタートさせ、その後海外留学制度の拡充、海外修学旅行の実施、ネイティブ教師の採用・増員など、英語教育や国際理解教育に力を入れてきた。吉田晋校長はその思いを次のように語る。

「留学先や研修先での活動は、ホームステイや学校交流を中心としています。日本と異なる環境に身を置き、現地の人と交流して、英語は心と心をつなぐコミュニケーションツール

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。 *2 全国のSGH指定校・SGHアソシエイト校が集まって行われる課題研究発表会。2018年は3月24日に関西学院大学にて開催された。 *3 実際の国連における会議と同様に、参加者が各国の大使の役を務め、議論、交渉を行い、決議を採択する大会。2018年は8月6、7日に東京で開催された。

ルであることを学べるよう努めてきました」

国際理解教育では、社会的な環境保護への関心の高まりとともに、地球と人類の共生や環境問題についての探究学習も取り入れるようになった。2000年度の校舎改築時には、発電量が分かる太陽光発電パネルを設置し、また、校内のトレットペーパーは学校で出た古紙の再生紙とするなど、生徒が環境問題を身近に考えられるようにしてきた。

そうした中、15年度、SGHの指定を受けた。「本校が英語教育や国際理解教育で育成してきた、コミュニケーション能力や社会問題に対する関心・教養などは、次期学習指導要



学校法人富士見丘学園理事長

東京都・私立富士見丘中学校高校校長

吉田 晋 よしだ・すすむ

教職歴40年。同校に赴任して40年目。日本私立中学高等学校連合会会長。

東京都・私立富士見丘中学校高校教頭

白鷺 訓彦 はくおう・くにひこ

教職歴33年。同校に赴任して33年目。「知徳体のバランスの取れた生徒を育て」

東京都・私立富士見丘中学校高校

町田 寛未 まちだ・ひろみ

教職歴21年。同校に赴任して21年目。英語科主任。「生徒が自分の長所を伸ばし、自己実現するためのサポートに全力を注ぐ」

東京都・私立富士見丘中学校高校

Kristofer Kent クリストファー・ケント

教職歴23年。同校に赴任して11年目。英会話科主任。「Language, Learning, and Life go hand in hand for us all」

領において育成が求められている資質・能力です。SGHの指定は、本校の教育活動をさらに発展させ、生徒の資質・能力を一層高めるチャンスになると考えました」(吉田校長)

オンライン英会話の学習効果が振り返りシートでさらに高まる

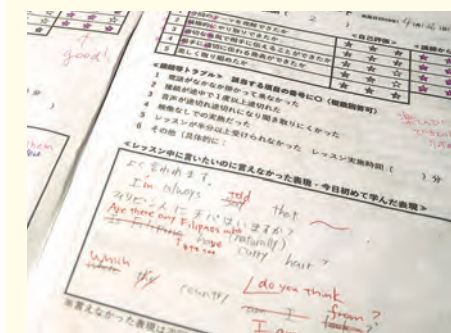
英語教育でまず強化したのは、スピーキングとライティングの指導だ。生徒の英語4技能を客観的に把握しようと受検した「GTEC」で、その2技能のスコアに課題が見られたからだ。ネイティブ教師の授業は週2回あり、日本人教師の授業も英語の活動を中心に進めているが、発言するのは英語が得意な生徒が多く、すべての生徒が英語を使う場面をつくる必要があった。そこで、17年度、中学2年次〜高校1年次で、「Online Speaking Training」(以下、OST) *4 を週1回導入した。すると、前期の終わり頃には、以前は発言が少なかった生徒が、普段の英語の授業でもよく発言するようになった。OSTでは、ヘッドセットをつけてネイティブ講師と対話をするため、ほかの生徒に自分の英語を聞かれる心配はない。そのため、英語が苦手な生徒も積極的に話し、学習を積み上げて自信をつけられるのだ。英語科主任の町田寛未先生は、OSTの効果を次のように語る。

「生徒は最初、ネイティブ講師の発言を理解できずにいましたが、それが聞き取れるようになると、英語で答えられ、聞き取った

表現も身につく、どんどん話せるようになっていきました。リスニングはスピーキングにとても重要だと、生徒は実感していました」18年度は振り返りシートを開発した。それは、授業終了後、ネイティブ講師に英語で言えなかったことを日本語で書いておき、翌週の授業までに自分で調べたり、教師に質問したりして、英語で表現できるようにするという取り組みで、自己評価と他者評価の差を把握させ、メタ認知を図るのがねらいだ(図1)。英会話科主任のKristofer Kent先生は、こう説明する。

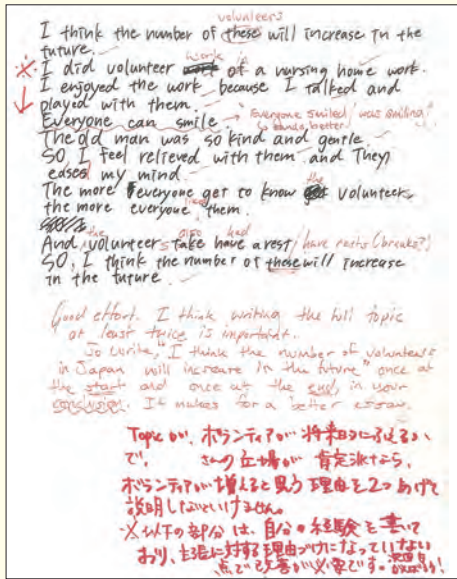
「英語で話す場さえあれば、スピーキング力が高まるというわけではありません。言えなかったことを放置せず、きちんと復習することが、英語の表現力を豊かにしていきます」週1回30分間でも、予習や復習の効果が大きいと、町田先生は実感している。

図1 「Online Speaking 振り返りシート」



振り返りシートには、自己評価や講師からの評価、初めて学んだ表現だけでなく、言いたかったのに言えなかった表現を書き込む。そして、その表現を調べて英語で書いてから、担当教師に提出。教師は英文をチェックし、必要に応じて添削して返却する。

*4 ベネッセが提供するサービスの1つで、インターネットのテレビ電話を使って、ネイティブスピーカーと1対1での英会話練習ができるサービス。



ネイティブ教師の添削内容を理解するのが難しい生徒には、日本人教師が説明を加える。
*学校資料をそのまま掲載

日本人教師とネイティブ教師が連携し、徹底的に鍛える

「OSTのレッスンの最後にある講師とのフリートークを、生徒は毎回とても楽しみにしています。自分の伝えたいことを考え、音読の練習をするといった自主学習が高い英語力につながっています」

ライティングの指導では、中学1年次〜高校2年次に、週末課題としてエッセイライティングを導入した。年度当初にネイティブ教師が英作文の書き方を指導。中学1・2年次は日記、中学3年次からは与えられたトピックについて書き、いずれもネイティブ教師が添削し、日本人教師が補足説明などを加えて返却する(図2)。連続性ある指導ができるよう、ネイティブ教師がどの生徒のエッセイを添削するのは固定

で決め、同じような間違いを繰り返している生徒は、日本人教師が個別に指導するようにしている。また、添削の内容は、生徒の英語力に応じて変えている。例えば、中学生の低学年では、文法事項を細かく指摘せず、自己表現に意識を向けさせる。一方、高学年や英語力が高いコースの生徒には、正確さに加え、適切な表現かどうかも指摘する。Kent先生は次のように語る。

「添削の観点は、論理的であるかどうかです。自分の立場を明確にし、考えが伝わる文であれば、論拠が欠けても、きれいな英文でなくてもよいと、生徒に伝えています」
そういった方針は、町田先生とKent先生が相談して決めている。同校の英語科担当は、日本人教師8人、ネイティブ教師6人。職員室は同じで、教科会以外にも頻繁に打ち合わせを行う。Kent先生は両者の連携が大切だと語る。

「外国人と対話するために、英語をツールとして使える力を身につけることは、これからの社会でも重要です。その力を育むために、日本人の先生と私たちの指導が連動していることが大切です。ライティングの添削などは大変ですが、英語がどんどん上手になっていく生徒の姿を目のあたりにすると、指導にも一層力が入ります」
指導改善の一方、基礎・基本の定着を図る従来の指導も重視する。

持続可能な社会とは何か？ 世界に触れる機会を交えて考える

「その他、リーディング力を高めるための「Extensive Reading」(辞書を使わない洋書多読の授業)も行っていきます。その一方で、従来から継続している週3回の単語テストで基礎力強化を図るなど、日常的な努力による基礎学力の積み重ねも大切に行っています」(町田先生)

学んだ英語力を実践的に使う場となり、これからの社会で求められる資質・能力を育む場の中心となるのが、SGHにおける探究学習だ。
高校1年次の必修科目「サステイナビリティ基礎」でサステイナビリティ(持続可能性)にかかわる社会の課題を理解し、探究学習に必要なスキルを習得する。その上で、高校2年次の選択科目「サステイナビリティ演習」では、「サステイナビリティから創造するグローバル社会」をテーマに、海外フィールドワークを中心とした探究学習を進める(図3)。いずれも探究の視点は、「災害と地域社会」「開発経済と人間」「環境とライフスタイル」の3つだ。白鷺訓彦(はくろくつひこ)教頭は次のように説明する。
「本校が以前から取り組んできたテーマ『地球と人類の共生』を発展させて、3つの視点を設定しました。課題意識を持ち、世界の人々と手を携えて問題解決に努力を惜しまない女性を育てることが目標です」

図3

SGHのプログラムの概要

目的

サステナビリティの視点を有し、課題解決に向け、海外の人々と協働的な活動を行う上でリーダーシップが発揮できる人材を育成する

高校2年次「サステナビリティ演習」(選択科目)

自身の関心に応じて3つのテーマに分かれ、その中で4~5人のグループとなり、大学との連携により探究を深める。海外フィールドワークでは、現地でも英語によるプレゼンテーションも実施。最後は各自、英語で論文を執筆する。

「災害と地域社会」

主に地震災害や防災について考える。日本と同じく地震が多い台湾でフィールドワークを行い、現地の高校生と意見交換、プレゼンテーションを行う。

「開発経済と人間」

現地の大学と連携し、シンガポールの観光政策、資源政策、経済発展などについて、日本との比較研究を行う。現地での取材内容も踏まえて、発表資料を作り、現地でのプレゼンテーションを行う。

「環境とライフスタイル」

持続可能な低炭素社会、環境問題の解決策を考える。マレーシア・イスカンダル開発地域でのフィールドワークで、温室効果ガス削減におけるマレーシアの環境施策と課題を調べ、現地の高校と交流授業などを行う。

高校1年次「サステナビリティ基礎」

(必修科目:「総合的な学習の時間」)

視点「災害と地域社会」「開発経済と人間」「環境とライフスタイル」

- 教師のチーム・ティーチングによる教科横断型授業
教師の関心を基に問いを設定。例えば、「日本人の災害観」「貧困の様々な見方」などについて、データや体験談、意見交換を通じて考えを深める。
- 慶應義塾大学との共同グローバルワークショップ(年8回)
大学院生・海外留学生とともに、グローバル規模の課題を自分たちで探し、解決に向けたディスカッションやリサーチなどを行う。海外に住む学生とICTを使って話し合う場もある。
- 岩手県釜石市フィールドワーク(1泊2日)
3つの視点ごとにグループになり、それぞれの視点で被災地の復興事業を学ぶ。
- レポート作成、研究発表
それぞれの活動を通して、生徒個々が考えたサステナビリティをまとめ、提言する。

*学校資料を基に編集部で作成

探究学習の特徴の1つは、全教師が一体となって進めていることだ。例えば、「サステイナビリティ基礎」では、教科横断で教師がチームをつくり担当する。各自が持つ関心や知識を基に生徒に問いかけ、生徒がそれについて考え、発言・提案していく。

「専門分野の指導でないからこそ、教師は生徒と一緒に考えられ、専門が違う教師同士がチームを組むことで、生徒に多様な視点を投げかけることができ、生徒の考えが深まっています」(吉田校長)

大学と連携した活動で、生徒が世界に直接触

れる機会を数多く設けていることも特徴の1つだ。「サステイナビリティ基礎」では、多くの海外留学生が所属する大学院とのワークショップのほか、ICTを使って海外に住む大学生とも意見交換をする。そして、3つのテーマで探究学習を行う「サステイナビリティ演習」では、台湾、シンガポール、マレーシアの3か所でフィールドワークを実施。英語でプレゼンテーションを行い、最後に英語で論文にまとめる。

「シンガポールでのフィールドワークにおいて、韓国とシンガポールの経済の比較研究を発表したところ、聴衆の多くが韓国からの留

学生であったため、厳しい意見が出されるといった苦い経験もありました。生徒にとつて、海外には多様な立場の人がいることを実感する、またとない機会となりました」(白鷺教頭)

多様な可能性を世界で発揮する生徒を育てていきたい

SGHを契機にした指導改善により、生徒の英語力は一層伸びている。「GTEC」では、中学3年次のライティングのスコアの平均値が、全国の高校3年次のスコアの平均値以上だった。また、「SGH甲子園」や「全国高校教育模範国連大会」、各種コンクールに生徒たちが出場するなど、学外での活躍も目覚ましい。

今後の課題は、それらの取り組みを学校の教育活動の柱として定着させることだ。

「SGHの指定期間終了後も持続可能な教育活動として定着させるために、負荷が増えすぎないように、ほかの教育活動との調整も検討していきます」(白鷺教頭)

同校は海外大学への推薦入学制度を有するなど、多様な進路を支援しており、18年度は延べ13人が海外大学に合格した。吉田校長は、グローバル人材育成への思いをこう語る。

「生徒には多様な可能性があり、それをより広い世界で発揮してほしいと考えています。そのために、使える英語力と深い教養、思考力、そして世界に目を向け、社会の課題に真摯に向き合う姿勢を育んでいきます」